



アンコール遺跡群 タニ窯跡群A6号窯の調査

写真上は発掘調査後の窯体を西から見た。全長6.5m、最大幅2.8mほどで、手前に焚口部の3カ所の孔が見える。左右の大型孔が薪を投入する燃焼用で、中央の小型孔が空気の調節用と推定される。

下の写真は、本窯で焼成された灰釉陶器である。小型の合子が主体で、写真手前の丸形合子と奥左の筒型合子がある。

本文 6 頁参照（撮影：中村一郎）





キトラ古墳壁画デジタル撮影

本撮影は明日香村教育委員会の依頼でおこなった。撮影機材挿入口などの制約から家庭用市販デジタルカメラを使用し、できる限りの高解像度撮影をおこなった。

本文20頁参照（撮影：井上直夫）



桂宮4号建築遺跡出土刻石

漢長安城桂宮4号建築遺跡の調査で、東区の門北側より出土した。

上下を欠くものの、左端の一行は「封壇泰山」と読める。泰山における封禪の儀式に関して記したものか。

本文3頁参照（撮影：中村一郎）



藤原宮朝堂院東第一堂（飛鳥藤原第107次調査）

藤原宮では、60年前に日本古文化研究所が確認した朝堂院一帯の再発掘を一昨年から続けている。今回は東第一堂の北半部を調査した。

東第一堂は桁行9間、梁行4間の四面廂付礎石建物で、栗石を詰めた礎石据付掘形や落とし込まれた礎石のほか、建設時と解体時の足場穴などを確認した。また、身舎の棟通りには柱がなく、総柱構造ではないことも明らかとなった。後方は大極殿土壇と耳成山。南東から。本文40頁参照（撮影：井上直夫）



先行条坊の交差点（飛鳥藤原第107次調査）

藤原京の条坊は宮の建設に先立って設定されており、一昨年の第100次調査では、部分的ながら、さらに先行して道路側溝が存在する事実も判明した。

写真は、全域に施工された後半期の四条大路南側溝と東一坊坊間路両側溝の接続部分。第100次調査で北肩を確認し、運河と推定していた溝は、この四条大路の南側溝であることが確定した。遠景は畝傍山。北東から。本文40頁参照（撮影：井上直夫）



石神遺跡（飛鳥藤原第110次調査）

13回目となる石神遺跡の調査では、斉明朝の北限にかかわる施設を確認した。この段階には、両側に溝をとまなう東西堀が2時期にわたって存在する。

写真右手の東西溝は、両期を通じて存続した堀北側の大溝。これに対応する南側の溝は、左手の東西溝から中央やや右に一部石組みが残る東西溝に付け替えている。その後、天武朝には全面に整地がおこなわれ、北限はさらに北へ移動する。東から。

本文72頁参照（撮影：中村一郎）



石神遺跡の石組溝（飛鳥藤原第110次調査）

この地域がもっとも整備された斉明朝後半の東西溝SD3902。この時期の北限と推定される東西堀の南側を走る。黄色の山土による整地ののち、側石、底石の順で構築しており、溝内には、水が流れていたことを示す細かな砂が堆積していた。西から。

本文72頁参照（撮影：中村一郎）



吉備池廃寺の僧房（飛鳥藤原第111次調査）

金堂の北方で、11×2間の掘立柱東西棟の僧房を確認した。柱掘形は一辺1.5～2.0mの方形で、深さ1.1～1.5m。建物周囲には、素掘りの雨落溝をめぐらす。奥に見える吉備池対岸の2箇所への張り出しは、左（東）が金堂基壇、右（西）が塔基壇である。北東から。 本文76頁参照（撮影：井上直夫）



吉備池廃寺の中門

（飛鳥藤原第111次調査）

金堂の南方で検出した中門の遺構。石組みの南面回廊南雨落溝を東へ延長した位置で、南に折れる石組溝（手前右）とそれにつづく抜取溝を確認した。北側にも対応する抜取溝の張り出しがあり、その間が中門基壇となる。西から。 本文76頁参照（撮影：井上直夫）



平城宮第一次大極殿院西部外辺

(上：平城宮第316次調査・左：平城宮第315次調査)

第一次大極殿院西部からその外辺を2回に分けて調査した。大極殿院は高い壇上に位置するが、その西部外辺は急激に落ち込み、佐紀池から南流する基幹排水路SD3825を含む平坦面へとつながる。

写真上は第316次調査区で、右奥は佐紀池。手前の大極殿院から急激に落ちる地形は宮造営当初までさかのぼり、佐紀池の水位も1m以上低かった。南東から。本文98頁参照（撮影：中村一郎）

写真左は第315次調査区。手前のSD3825は第316次調査区の下流に当たると。奥に大極殿院西面築地回廊の高まりがあり、左後方に大極殿を望む。南西から。本文92頁参照（撮影：中村一郎）

旧大乘院庭園の東大池北西部

(平城宮第318次調査) 写真右

かつての東大池北西部は、現況より西に広がっていたが、これを埋め立てて、写真中央にある高まりや溝など、庭園の様々な施設が造られたことを明らかにした。また、この西方で漆喰の池を検出した。北西から。

本文130頁参照 (撮影：中村一郎)



西隆寺掘立柱遺構SX850

(平城宮第320次調査) 写真下右

西隆寺中心伽藍を囲む回廊外側の西南部で検出した、巨大な掘立柱遺構。

長方形の大きな掘形の主軸上に、2本の太い木柱が規則正しく南北に並ぶ。埋土も特徴的である。その特殊な地下構造は類例に乏しく、性格付けは今後の課題として残った。北東から。

本文136頁参照 (撮影：中村一郎)

西隆寺西面回廊の瓦積基壇基底部

(平城宮第324次調査) 写真下左

西面・南面回廊遺構を検出したが、このうち西面回廊の東縁基底部は遺構の残存状況が良く、基壇の外装が瓦積みであることがはじめて明らかとなった。

写真はその検出状況で、落下した瓦片が雨落溝に沿って散乱している。これを除去すると、溝底に瓦敷が残存していた。北から。

本文140頁参照 (撮影：中村一郎)





興福寺中金堂（平城宮第325次調査）

興福寺中金堂とそれに取り付く北回廊の調査。調査範囲は中金堂の基壇全体を含む、東西51m×南北36m、面積は1836㎡である。まず、現存していた文政2年（1819）再建の中金堂（写真下）を解体し、さらに基壇外装も地覆石を残して撤去した。調査は2000年12月からはじめ、2001年6月末まで行う予定である。2000年度は須弥壇を掘り下げるなど主に基壇上の調査をおこなった。写真上は須弥壇を断面観察用の畔を十字に残して掘り下げたところである。

次年度も引き続き、基壇上の調査ならびに基壇周辺の調査をおこなっている。その進展に伴い、現段階での見解を大きく変更する可能性も十分に考えられるため、詳細の報告は次年度にまとめておこなうこととする。

興福寺中金堂は、明治時代に須弥壇が削平された際に、千点をこす奈良時代の鎮壇具が出土している。今回の調査においても、それに類するものが出土するのではないかと期待されている。

上：2000年度末の状況・北西から。（撮影：中村一郎）

下：中金堂解体前・南東から。（撮影：杉本和樹）